

したじり れんたい もひと
眞実の連帯を求めて

しゃかいふくしほうじんせうせうしゃわいじほいくえん
社会福祉法人青丘社 桜本保育園

一、新しい胎動

川崎の南部、無数の煙突が林立し、さまざまな労働者がその生を営む臨港地帯の一角に、ひとつ的新しい社会福祉法人が産声をあげた。一九七三年十月四日のことである。

その名を青丘社といつ。青丘 それは韓国の別名である。韓国語ではチヨングと読む。

長い道のりだった。法人認可を取得するまでの毎日、それは文字通り苦闘の連続であった。いつの時代であれ公共事業は、人間の中に宿る善意にその出発点をもつゆえ、そのことを銘心していただきたいとは、県民生部長の訓示

であつた。県庁で認可書を手わたされた時に、いただいたことばである。

善意は決して強要するものではない。自發的だからこそ善意となる。しかし、それだけに善意を集め何らかの事業をなすのは、並大抵のことではあるまい。私たちおいてもそうであった。野心なき人の善意を、ひとつの大好きな力へと結集させることにじれほど苦労したであつたか。だが、そのような苦しみと同時に、いや、それにまかって私たちに重くのしかかつてきたひとつ現実があつた。

それはこの法人が、在日外国人、すなわちこの国に一定の在留資格をえて居住する私たち韓国人によつて設立され、運営されていくという事実に起因して、日本社会で韓国人が、社会福祉法人の理事会を構成して公益事業を行つていく。これはまれに見るケースであろう。いや、類例がほとんどないと云ふべきかも知れない。それだけに私たちは、韓国人であるがゆえに、さまざまに直面させられたのである。障害にぶつかつた。多くの制約を余儀なく

われられた。日本社会の壁のあつさを、ほんとうにしみじみと味わされもした。
たたか れんやく 戦いの連続だった。

けれども、私たちはそつしたプロセスの中で、多くの日本人兄弟姉妹たちがさしのべてくれたあたたかい協力と熱い友情を決して忘れてはいない。彼らは私たちにとりひとすじの希望の光であった。おそらく、彼らの支えと励ましはなくしては今日の私たちはなかつたであろう。その思いは、海外の諸キリスト教会、とりわけカナダ長老教会に対しても同じである。人間の内に宿るまことの善意に触れたのも、彼らを通してであった。

今、青丘社は未来に向つて羽ばたこうとしている。チヨングー何とすばらしく名前だらう! 私たちはその名にふさわしい歩みをしていきたい。今までがそうであったように、これからも私たちの前にはあつい壁がたちはだかるであろう。だが、私たちはくじけまい。多くの人々、その内にある善意を知つた以上私たちには絶望はありえないのだ。

私たちには夢がある。限りない夢がある。労働者の町、この海に臨んだ庶民の町で、私たちは生きていいく。図書室を作り近くの子供たちに提供しよう。法律相談や医療相談も始めよう。青年講座や婦人学級を開設して共に語り行動しよう。労働講座も開きたい。働く婦人たちのために保育園も充実させよう。

だが、私たちは何にもまして、日本に居住する韓国人として、誇りをもつてこの業にたずさわりたく思う。民族の歴史や文化、祖国のことばを失つてしまつた私たちの子弟が、眞に民族の一員として、たくましく生きる人間として、この地に生活できるように共に歩みたく願うのだ。この異国にあつて、韓国人が韓国人独立主体的に生きる時、それが同時に日本人を眞に日本人として立てしめることになるのだと思う。ナショナルなものを見せてることによつて、眞のインターナショナルな関係が生まれてくるのではないだらうか。

長い社会福祉事業の伝統に自らを接続せつゝ、今置かれた場とその関係性のまつただ中に、堅く立つて歩んでいこう。これが私たちの姿勢であり、決断だ。新しい胎動が始まつた。それを温かくみまもり育てていこう。

二、信仰共同体——川崎教会

社会福祉事業は、基本的には人の善意に基礎をおく共同体の業である。善意がもとよりはむしろわざわざしておこなわれる。そこで、それとのあつたく同等の比重をおこして「信仰」共同体について言及せざるをえない。善意を生みだした信仰者の群れについてである。それは「在日大韓基督教川崎教会」である。

現在日本には六三万近くの韓国人が在住しているが、

ではなく「私企業化」といへきたと語るのである
かぶくじんげき
韓国人をめぐる地域的状態を、いわば戦前の、つまり「過去」の歴史がうみ
わいききてきじやうたい
せんぜん
ひつまつ
かこ
れきし

である。日本の敗戦は韓国にとり独立解放の時であるが、大半の韓国人は祖国に帰り、現在右の上げた数の人々が今日まで日本に在住してきている。民族大移動ともいいうほどの多数の人々が、なぜ日本に居住しているのか？それには、戦前日本の海外政策、ことに対アジア政策と深い関連をもつことがありである。

るが、要するに日本の「三六年間にわたる朝鮮殖民地」支配の落とし子なのである。特に太平洋戦争末期日本国内の企業や鉄道敷設・炭鉱・ダム建設などの労働力補給源（徵用）として、あるいは、戦闘員補充（徵兵）として、強制的に連行されて渡日した人々がまさにそれである。そして戦後その多くの人々がそのまま日本に居住している。川崎に住む九千名近くの韓国人は、ほとんどそうした過去の歴史を背負つて生きている。その大半が臨港地帯、つまり鉄鋼・造船を中心とする大企業が雑居している地域に生活しているのは、彼らのこの

ような生活史を如実に物語るものだ。

川崎教会に所属するキリスト教徒は、そのほとんどが韓国人であるが、右に

のべたような歴史を行きぬいて今日にいたつた。あるいはその子孫である。

きょうかい
い　ち
わいき
たと
せんぬいちか
じゅう
さざがく
しゃつしおのがつり
わや
教会が位置する地域には、例えば千名近くの児童が在学する市立小学校に、約

ひやくねる
かんじいんせいと
わがく
といひ
かんじいん
韓国人徒が通学していり、統計にみられるように、

かずおお
せいかつ
かず
にん
かんじけい
きんぞくだんたい
北朝鮮系の民族団体や

きょうづくまかん
敵機の攻撃
おののおのじくじ
みんなくわんぢり
てんかい
敵機の攻撃

意味における隣人なのである。

こうして保育所は開設された。保育カリキュラムにおいても、従来の六領域のほかに、新しく「となり人」がつけ加えられた。そして、園児は、日本の子供受けのこととなった。私たちは、こうした保育の場における教育実践が、その背後に川崎教会という信仰に基づく共同体を支援団体としていだく中で、少しずつなされてきたという事実を、感謝をもって思いおこすのである。

三、無認可から公認保育へ

三人の保母と三十数名の子供たち、そして木造平屋の狭苦しい保育室一室になかまぐりよる。無認可保育所（やがて名前を桜本保育園とした）時代の一般的イメージはこのようである。それは五年間にわたって続けられ、三五〇世帯以上の家庭と接触を持ち、毎日の保育だけではなく、月一度開く「父母会」（年に三回以上欠席する）と退園せざるという厳しい条件をつけた（）を通して、園の教育方針・内容を共どもに話しあつてきた。保育は、単に共稼ぎ夫婦の便宜をはかるため、といふ当初の考えは、否応なくのりこえられ、家庭と園とが互いに信頼しあう中に生じた。そのため、「してあげる」のではなく、「自らが眞の人間になるための不可欠」の業としてうけとめられ始めた。韓国人園児にはきちんと本名を使わせ、その呼び方も漢字を日本式に読むのではなく、「日本名を使い、それを誰に対しても堂々と名は体をあらわすからである。子供が日本名を使い、それを誰に対しても堂々と名のることを通して、いつの間にか、日本名を使用することを当然と見ていた（それを同化現象という）親自身が逆に変えられ、自分の民族的・人間的主体を回復するというできいともあった。自分の子供が、最も近い国のことばを外国语として、最初に勉強させてもらつてうれしい、と熱っぽく語つてくれる日本人の母親もいた。確かに遠いヨーロッパやアメリカの言語に先立つて、

韓国語や中国語を身につけるのは、日本人にとって大切なことである。昨年の八月、私たち保育園関係者は、教会の青年たちを交えて、一泊三日の研修会を開設して、年目になる年であり、保母の数も常時五名は確保され、園児数も七十名に達し、韓国人保母を中心にして、さらにには日本人職員を入れた大所帯になりつつあった時期でもある。そして、国にとつての最大の問題は、それまでの無認可形式の保育園を、公認されたそれへと移行させるに際して（移行措置は、法的に昨秋決定された）、教育方針・内容、制度的財政的保障などに関する園側の、厳密にいえば保母たち自身の教育的姿勢をどのように確立するか、ということであった。それに先立つて、法人設立委員会や教会関係者の間で、公認保育の是非論（例えば、財政的保障がなされる利点と行政レギュルでの規制、教育内容への介入などのマイナス面を、どうとらえるべきか）が戦わされたが、研修会でも、それは終始白熱した議論の対象となつた。いろいろな角度から検討した後、私たちは「研修会報告書」を作成した。このレポートは、ある意味で、桜本保育園の五年間を総括したものといえよう。「さて、桜本の地区に保育園を開園して、五年目にに入りました。この間、実際にさまざまなことがありました。在日大韓基督教川崎教会の桜本保育園として、キリスト教精神にもとづき、それぞれの子供に接してきました。さもありまことに子供たちの人格を尊重し、ありのままの存在を認めるとは、本当に意味で子供たちのいじめをやめさせたいからやめさせようから」として、地域社会に奉仕するところの意味での保育のあり方は、どのようなことなのか、地域社会に奉仕するところの意味での保育のあり方は、じのようなことなのかを、試行錯誤をくりかえしながらも、どうにか続けてくることができました。」

ここには、保母たちの懐のむ心情がありのままに表現されている。試行錯誤のくりかえし、五年間を一言でいえば、まさに、このことばに集約されるであろう。続いて、この歩みの全てが、園父兄、地域住民、教会関係者の変わらざる支援によって、今日に至ったことを感謝しつつ、今後はその日を地域社会に向け、こう語るのである。

「私たちの住んでいる地域には、公園に代表されるようなこんな困難なことが存在しております。私たちの保育園の中にもそれはあります。

子供たちが背負わされているさまざまな問題、それは小児ゼンソクの子がい

たり、障害のある子がいたり、また家庭環境にめぐまれない子、そして韓国人を父母にわづ子の生き方育て方の悩み、など実に多くあります。」

桜本保育園は、軽度の身体障害児を意図的に入園させ、それらの子供たちが障害をもたぬ子供たると一緒に生活することにより、埋もれた可能性を少しでも発掘でき、同時に無障害児が人間としてのやさしさ、いたわりなどの情緒を豊かに身につかりれるよう教育的配慮をしてくる。注目に値する教育実践だとと思ふ。

最後に報告書は次のようにしゆべつていふ。

「考えてみますと、純真な子供たちの保育を通して形成される人間形成において、私たち保母の心がまえはむじよ、父兄の皆さま共どもに深い愛情をもって、眞に子供の将来を案じ、接していくことの大切さ、責任の重さをかんじないではいられません。」

教育権は教育を受けた側にある。自明の理である。だが、絶えずその権利は横暴な為政者、国家権力によつて剥奪されてきた。それが私たちの現実である。だから、そのゆがんだ現実を変えなければならぬ。保母たちは今はつきりとそれに目をぬつゝある。その目をぬじて、地域社会に深く入りこむと共に、その問題の根源を鋭く、おた的確に指摘し、解決へと向かわせていく力になる。青丘社の業に参与する私たちは、今このことを深く考えせられていく。」「人が全世界を得ても、自分の命を失つたら何の益があつつか?人はどのよにしてそれを買ひむじよ」とができるやうやく。(新約聖書)

一人間の生命は地球よりも重いのだ。しかし、それゆえにこそ、その生命を失わしめ、ないがしろにするあつい壁や障害と戦わねばならないのである。勝利せねばならない。川崎の、依然として不気味な黒煙がまい上がつてゐる南部の一隅にあって、私たちは、立ち上がりうとしている。多くの人々の善意と、

愛によつて働く信仰とを、車の両輪として、双手の武器として、歩み出さうとしている。眞実の連帶を求めて…。(一九七四・三・一)

(注) 文責はすべて桜本保育園園長の李仁夏と社会福祉法人青丘社理事の小杉剋次にあります。

※四〇年以前、青丘社の立ち上げに当たつての文章です。今時点では、「軽度の身体障害児を意図的に」など、違和感のある表現もありますが、当時の想いを感じ取つて、継承すべきエッセンスを読み取つてください。